ウガリト語研究(1)

——ウガリト語の *primae waw* 動詞 WLD について——*

津村俊夫

北西セム語では、語頭の */w/ が /y/ に変化するのが通常である[1]。例えば、

(1)

	東セム語	北西セム語			南西セム語	
	アッカド語	ウガリト語	ヘブル語	アラム語	アラビア語	エチオピア語
「生む」	walādu	yld	yālad	yəlēd	walada	walada
「月」	warḫu	yrḫ	yéraḫ	yəraḫ	——	warx
「ぶどう酒」	——	yn	yáyin	——	wayna	wayn

の場合、アッカド語（東セム語）やアラビア語・エチオピア語（共に南西セム語）では、語頭の w が保持されているのに対して、ウガリト語・ヘブル語・アラム語等の北西セム語では、音韻変化の法則

(2) $*w \rightarrow y \,/\, \#__$

が働らいている。

しかしながら、次の諸例にみられるように、上記の法則に従わないで本来の w が保たれている場合がある。

(3)

	アッカド語	ウガリト語	ヘブル語	アラム語	アラビア語	エチオピア語
「子供」	waldu	{yld wld ?	{yéled wālād	{yld wəlad	walad-	wald
「そして」	u	w	wə	wə	wa	wa
「かぎ」			wāw			
「侮辱する」	wapāšu(m)[2]	wpṯ				

「そして」の場合、Blau はヘブル語の wə を「前接辞 (enclitic) であって語頭の位置に来ないから[3]」であると説明しているが、その意味するところは必ずしも明らかではない。他方、Gordon はウガリト語 w が本来、語頭の子音ではなく、エジプト語 *iw* に見られるように、元来、もう一つの音節が w の直前にあったと説明する。すなわち、この音節が脱落する前に音韻変化 (2) が完了

していたと考えるわけである[4]。

ヘブル語の「かぎ」wāw は、Blau が説明するように、おそらく後方の w との同化現象 (assimilation) の故に、語頭の w が保持されているのであろう。

ウガリト語 *wpṯ* は、恐らく "to spit" (つばを吐く) という意味で、擬声語 (onomatopoea)[5]であろうから、語頭の w が保持されていると説明できる。同一の語源に逆りうるアッカド語 *wapāšu*「侮辱する」と意味的にもよく対応している。

さて、「子供」(*wald-[6])の場合は、少々複雑な状況を呈している。アッカド語、エチオピア語にもとづいて、祖形を *wáld- と想定してみると、ヘブル語の二つの形のうち、yéled について

*wáld- > yáld- > yéled

と説明することができる。すなわち、

*wáld- > yáld-

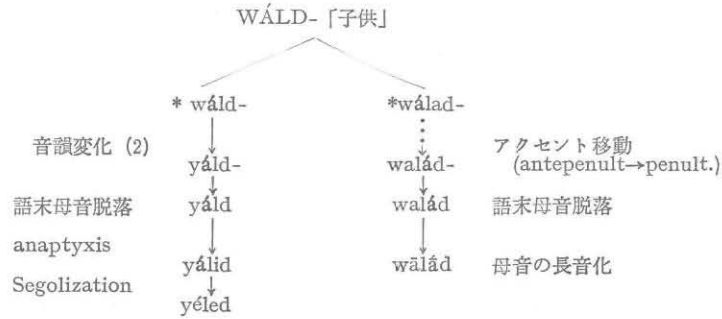
において、音韻法則 (2) が働いた。そして、

yáld- > yálid > yéled

anaptyxis[7]が起って、結果的に 'segolate' 名詞の yéled が出来上ったわけである。しかしながら、同じヘブル語のもう一つの形、wālád は、アラビア語 walad- に基づいて想定しうる祖形 *wálad- から、

*wálad- > wālád

と変化したと考えることができる。この語形は、上記の音韻変化 (2) がすでに完了していた時期に北西セム語に導入されたと想定することが可能である。以上の事柄を図で説明すると次のようになろう[8]。



さて、ヘブル語と同じ北西セム語に属するウガリト語にも、「子供」という意味を持つ *yld* と *wld* の二形態が存在していたとしても不思議ではない。た

だ、ヘブル語の場合のように母音を伴った表記方法でないために、ウガリト語の *wld*「子供」の存在を確認することは容易な業ではない。ウガリト語アルファベット文字表記による子音文字連続 *wld* が、どのような場合に名詞「子供」を意味するのか、あるいは、それは *primae waw* 動詞[9]の名残りであるのか、それとも別の説明が可能であるのか、これらの問に答えるためには、文脈的な判断とともに系統だった音韻論的究明が必要である。

筆者の見るところ、既刊のウガリト語アルファベット・テクスト中に、*wld* という子音文字連続が少くとも7箇所ある。そのうち、ケレト叙事詩に現われる5例は、最近、Dietrich, Loretz, Sanmartín の三氏によって論じられている[10]。しかし、なお組織的な音韻論的解明が必要であるように思われる。7つのテクストを個別的に詳論する前に、従来の諸説を整理すれば、筆者の知る限り、

(4) ⓐ *wld*=w+yld　(不定詞)
　　ⓑ *wld*=w+ld　(不定詞)
　　ⓒ *wld*=w+ld　(命令形)
(5) ⓐ *wld*　(名詞)
　　ⓑ *wld*　(動詞 R_1=w, G. 受身)
　　ⓒ *wld*　(動詞 R_1=w, G. 不定詞)

のようになる。しかし，ケレト叙事詩の5例に関しても、それら全てを一律に説明する者と文脈に応じて区別している者とがあり、他の2例を含めると、諸学者の説明はまちまちである。

*　　*　　*

最初にケレト叙事詩 Krt: 152-153 および 298-300 に見られる *wld* に注目しよう。

(6) *wld. špḫ. lkrt*
　　wġlm. l'bd. il

H.L. Ginsberg は、ここの *wld* を接続詞 wa に不定詞 yalādu ("infinitive consecutive") が付いて、

(7) wa+yalādu → walādu

と説明する [→(4)ⓐ][11]。
換言すれば、約音 (contraction)

(8) aya → a/â

が起ったとするのである。彼は、これと類似した例として *bd* "in the hand"

をあげ、

(9) *bd* [badi] < [ba+yadi]

と説明する。この Ginsberg の説は、Albright, Baumgartner, Wevers, Dahood, Caquot-Sznycer-Herdner 等[12)]によって受けいれられている。

しかしながら、(8) のような音韻変化を支持する証拠は、ウガリト語のアルファベット・テクストにはいまだ見出されていない[12a)]。

(10) *wyṣi*=w+yṣi
wyrd=w+yrd
wyšn=w+yšn
wyṯb=w+yṯb
wytn=w+ytn[13)]

(11) wa+yqtl [yaqtul-]

という諸例は、waya→wa/â という音変化の仮説を反証するものである。

さらに、*bd* の場合は、*yd* の副次的な形態 (byform)[14)] である *id* に前置詞 *b* がついたものと考えるべきである。

(12) *b*+*id*=/ba+'idi/ > /ba-idi/ > /badi/=*bd*

すなわち、母音間の声門閉止音〔ʾ〕が喪失する。

(13) ʾ → ø/V_V

その結果、a-i という母音連続が生じ、ここにおいて、いわゆる Sandhi (連声) 現象が起って二つの母音のうち強母音 a に i が融合 (fuse) したと考えられる[15)]。

(14) a-i → a (Sandhi)

類似現象としては、*d*～*id* に関して、

(15) *šb'd* ～ *šb'id*[16)]

があり、/šab'ad/</šab'a'id/ と説明しうるので、(12) を側面的に支持するものである。以上の事例から、*bd* は、Ginsberg, Dahood 等の主張する (7), (8) の音韻変化の仮説を支持するための重要な証拠とはならない。従って、テクスト (6) の *wld* を (4) ⓐ のように w+yld (不定詞) と説明するべき積極的な理由はほとんど存在しないといわねばならない。

次に、(4) ⓑ のように、*wld* を接続詞 *w* に語根 *yld の不定詞 ld がついたものと説明する可能性について考察しておきたい。Aistleitner は、後述するように、128:III:20 の *wld* をこのように分析しているし[17)]、また 51:V:70 の *wtn* を、w+tn (*ytn の不定詞) と分析している[18)]。de Moor によれば、こ

の *tn* は通常の不定詞 *tint (>titt: תִּתּ) からその女性形語尾 -t が脱落した形である[19]。たしかに、ヘブル語、アラビア語、エチオピア語等、「西セム語」に属する言語では、*primae waw* (R_1=w) 動詞の不定詞は、R_2R_3 に「女性形」語尾 -t を伴ったものが通常形 (R_2R_3t) である[20]。たとえば、

(16)　ヘブル語[21]：　lēdā(h) <*lidat=lid+at
　　lédet <*lidt=lid+t
　　šébet <*šibt=šib+t
　　réšet <*rišt=riš+t
　　但し、　ləyoršénû=lə+yórš ($R_1R_2R_3$) +énû
　　男性形　dē$^{a'}$<*di' (R_2R_3)

(17)　アラビア語[22]：　lídat=lid+at
　　'ídat='id+at
　　rítat=rit+at
　　但し、　wá'd-($R_1R_2R_3$), wírt-($R_1R_2R_3$)

(18)　エチオピア語[23]：　rédat=red+at
　　lédat=led+at
　　hábt=hab+t
　　但し、　wéḥiz/wéḥzat ($R_1R_2R_3$)

これらのリストから明らかであるように、「西セム語」の *primae waw* 動詞不定詞形は、通常は、

(19)　R_2VR_3(a)t: e.g. lédet<*lidt, lidat, habt

(20)　R_1VR_2(V)R_3: e.g. yorš<*wurúšu, wa'd <*wa'ádu, weḥz <*wiḥízu[24]

のいずれかであって、ヘブル語の dē$^{a'}$<*di' (R_2R_3) のような場合は例外的である。従って、ウガリト語アルファベット・テクストにおける *wld* を (4)ⓑのように、不定詞 *ld* (R_2R_3) を伴うものであると説明する根拠は非常に薄いといえる。

ところで、(4)ⓐの不定詞 (yld) と (4)ⓑの不定詞 (ld) は、その起源が全く異なることが、以上の議論からも、推論できるであろう。これら二つの不定詞は、いわゆるヘブル語における、Infinitive absolute と Infinitive construct とに対応しているといえよう。

さて、次に *wld* に関する説明として、(4)ⓒのように、接続詞 (w)+yld の命令形 (ld) と分析することが、純粋に形態論上の理由から、可能である。確か

に、ウガリト語アルファベット・テクストにおける wR_2R_3 という形式をもつ子音文字連続に注目すると、*wdʿ* (2114:13), *wzi* (75:I:19), *wrd* (51:VIII:7, 67:V:14), *wtn* (52:71, 72, 2Aqht:VI:18, 1019:I:12) の諸例は、その文脈から判断して、

(16) wR_2R_3=w(接続詞)+R_2R_3 (*primae yod* 動詞、R_1=y の命令形)[25]

であることが明らかである。すなわち、

(17) *wdʿ*=wa+daʿ (*ydʿ)
wẓi=wa+ẓiʾ (*yẓʾ)
wrd=wa+rid (*yrd)
wtn=wa+tin (*ytn)

このように、アルファベット文字表記による $w\,R_2R_3$ のパターンの少なからずのものが、*primae yod* 動詞 (R_1=y) の命令形 (R_2R_3) を含んでいることが明白である。しかしながら、当該テクスト (6) の *wld* は、文脈から判断して、(16) のように分析することはできない。

次に、*wld* を *primae waw* (R_1=w) の語根にもとづく一形態であると考える可能性 (5) について注目してみたい。テクスト (6) の *wld* をそのように考える学者の間にも次のような意見の相違が見られる。

(5) ⓐ *wld* (名詞) : "child" (Gordon), "birth/Geburt" (Driver, Gibson, Aartun), "Ein Stammhalter" (*wld šph*) (Dietrich-Loretz-Sanmartín)[26]

(5) ⓑ *wld* (動詞 R_1=w, G. 受身) : Gordon, Gray, Aistleitner, Sauren-Kestemont 等[27]。

(5) ⓒ *wld* (動詞 R_1=w, G. 不定詞) : Gordon[28].

さて、*wld* を「子供」と考える立場 (5)ⓐから検討していこう。ウガリト語アルファベット・テクストには、すでに *yld*「子供」が現われている (e.g. 52:53, 606:3) ので、もしここでの *wld* も「子供」を意味するのなら、ウガリト語の *yld* と *wld* は、すでに注目したように (3)、ヘブル語の yéled (<*wáld-) と wālád (<*wálad-) にそれぞれ対応する。北西セム語であるヘブル語・アラム語に、*yld 形と *wld 形が共存しているのであるから、ウガリト語にもこれらの二形態が「子供」という意味で存在していたという可能性を否定することはできない。しかしながら、テクスト (6) の並行法の構造分析の観点からするならば、*wld* を名詞「子供」等と説明するのは、必ずしも説得的ではない。なぜなら、(6) は、

(18) wld. šph. lkrt　(a—b—c)
　　wġlm. lᶜbd. il　(b′—C′)

と分析するのが最も自然であるからである[29]。
まず、

(19) *bn* "son" ‖ *šph* (125:10, 21, 105, 111)
　　šph ‖ *yrt* "heir" (Krt:24–25)

に見られる *šph* の用法から、テクスト (6) でも *šph* ‖ *ġlm* "boy" と判断するのが適当である。たしかに、Gordon は当該個所の *ġlm* を、*wld* ‖ *ġlm* と考え[30]、*wld* "child" に対応すると説明している。同様の主張は、*wld šph* 全体を「長男」"Stammhalter" と訳出する Dietrich-Loretz-Sanmartín によってもなされている[31]。しかしながら、詩形論の観点から見れば、(6) は、Gordon 等による。

(20) wld. šph. lkrt　(A　b)
　　wġlm. lᶜbd. il　(a′　B′)

という分析よりも、(18) の方が安定している。もし (18) の分析が正しいとするなら、*wld* は、名詞であるよりも、動詞である方が説得的である。すなわち、(18) は、

(21) (V-N-Prep. Ph) 3
　　(N-Prep. Ph) II

というパターンをとっていることになる。*UT* における Gordon の分析によれば[32]、ウガリト語の二行並行法の中で、3 ‖ II のパターン、すなわち、本テクストのように、一行目が3語（項目）で、二行目が2項目である（そのうち1つが Ballast Variant) のような場合 (a—b—c//b′—C′)、二行目で欠落している項目 (a′) は、通常、動詞 (v) である。たとえば、Gordon が 3 ‖ II と分析しているものを集めると、

(22) Ⓥ-s-o ‖ o′-adverb....§ 13.123
　　Ⓥ-s-p ‖ p²-P....§ 13.128
　　Ⓥ-s-p ‖ S-p′....§ 13.129
　　Ⓥ-o-p ‖ o′-P....§ 13.136
　　Ⓥ-o-p ‖ o′-o″....§ 13.137
　　Ⓥ-o-v2 ‖ o′-V2....§ 13.138
　　Ⓥ-p-v2 ‖ P-V2....§ 13.142

o-Ⓥ-p ‖ O-P....§ 13.152
o-p-Ⓥ ‖ O-p′....§ 13.155
p-Ⓥ-o ‖ p′-O....§ 13.157
p-s-Ⓥ ‖ P-S....§ 13.159
p-vocative-v ‖ P-V....§ 13.161
x-p-s ‖ P-s′....§ 13.169

そのほとんど全ての場合、二行目で欠落している項目は、一行目の動詞 (v) に対応する部分であることが明らかである。

以上の理由により、テクスト (6) の *wld* を名詞「子供」等と考える (5) ⓐよりも、むしろ動詞 (*primae waw*) のある形と分析する方が、ウガリト語の詩形論から判断して、よりふさわしいと言うことができるであろう。

では、テクスト (6) の *wld* が *primae waw* 動詞である場合、N (*špḥ* ‖ *ġlm*) はその動詞の主語 (s) であるのか、それとも目的語 (o) であるのか、という問題がある。別の角度から見ると、*wld* は能動態 (to bear) なのか、それとも受動態 (to be born) なのか、ということになろう。この点を考察するために次の諸点に注目したいと思う。

さて、ウガリト語の動詞句[32a] *yld*+N+*l*～ には、理論的には次の二通りの解釈が可能である。

(23) ⓐ *yld*+N(o)+*l*～「ある人が N を～に生む」
ⓑ *yld*+N(s)+*l*～「N が～に生まれる」

前者の型に属する例文は、現存テクストにおいては、すべて主語が 3 人称女性単数であり、動詞は G. yqtl 形の *tld* である (76:III:21, 128:II:23, 25)。後者に属すると思われる箇所は、二つ (76:III:36, 2Aqht:II:14) あるが、76:III:21 は、本文の復元によるもの ([*yl*]*d*) であるから、ここでは特に 2Aqht:II:14-15 に注目したい。

(24) *kyld. bn. ly. km.·aḫy.*
wšrš. km aryy

このテクストで、*bn* が男性単数名詞であり、他方、動詞 *yld* が 3 人称女性単数形ではありえないので、*bn* を主語、動詞 *yld* を受動態と考えるのが適切である。Gordon は、

(25) "For a son is born unto me like my brothers,
Even a root like my kin"

と訳出している[33]。この *yld* を受動態ととることについては、大方の意見の一

致がみられるが[34)]、*yld* を

(26) [yulida] G. qtl. passive. 3.m.s.[34a)]

(27) [yûlad-] (<*yuwald-) G. yqtl. passive. 3.m.s.[35)]

のいずれに説明するのかに関しては、明確な答えが与えられていない。

ここで、当該のテクスト (24) と本質的に同一の統語構造をもつ本文に注目したい。'nt:V:11-12 は次のとうりである。

(28) *lytn. bt. lb'l. kilm*
[*wḫz*] *r. kbn. atrt*

このテクストの *ytn* は、ほとんどの学者によって能動態 ("he give(s)") ととられているが[36)]、Gordon は一慣して受動態 ("a house be given to Baal") と考えている[37)]。テクスト (24) と (28) とは、本質的に同一の統語構造

(29) V+N+*l*～+*k*.... // *w*+N'+*k*....

を持っているので、(28) の *ytn* を、(24) の *yld* と同じく、(Gordon のように) 受動態と考えることが適切ではないだろうか。もし、*ytn* が受動態であるならば、その発音 (vocalization) は、

(30) [yutina] G. qtl. passive. 3.m.s.

(31) [yûtan-] [37a)](<*yuwtan-) G. yqtl. passive. 3.m.s.

のいずれかとなる。

こんどは、テクスト (28) とほとんど同一の本文に注目したい。51frag.: 3-5 は次の如くである。

(32) *wtn bt. lb'l. km*.·[*i*] *lm.*
wḫzr. kbn.·[*a*] *trt.*

ここでも、Gordon は、動詞を受動態に訳しているが ("That a house be given to Baal like the gods")[38)]、*wtn* がいかなる形態であるのか説明していない。我々は、ここで、テクスト (28) の *ytn* が文脈的にも形態的にも yqtl 形であると考えられるので、それに対して、テクスト (32) の *wtn* が qtl 形・受動態であると想定したい。すなわち、

(31) ytn [yûtan-] G. yqtl. passive, 3.m.s.

(33) wtn [wutina] G. qtl. passive, 3.m.s.

この点は、音韻論的にも支持されよう。北西セム語であるウガリト語に [wutina] 形が存在すると主張するためには、音韻法則 (2)、即ち

(34) *w → y / #____

に従わないで、本来の *primae waw* (R_1=w) が残っているための積極的な理

由がなければならないはずである。そこで

(35) *w → w / #___u

という付則を設定することが必要である。すなわち、*primae waw* (R_1=w) の第一子音 w は、その次に母音 u が来る時に、y に変わらないで、そのまま保持される、と考えるべきである。このことは、音声学的にも十分支持される[39]。

以上の議論を整理すれば、テクスト (24) の *yld* は、

(26) [yulida] G. qtl. passive. 3.m.s.

(27) [yûlad-] G. yqtl. passive. 3.m.s.

のいずれかに説明することが可能である。そして、(24) と本質的に同一の構造をもつテクスト (28) の *ytn* とテクスト (32) の *wtn* は、それぞれ

(31) [yûtan-] G. yqtl. passive. 3.m.s.

(33) [wutina] G. qtl. passive. 3.m.s.

と説明することが適切である。

ここで、テクスト (24) の統語構造

(23) ⓑ *yld*+N (s)+*l*～「N が～に生まれる」

と類似した構造をもつところの、テクスト (6)

(36) *wld*+N+*l*～

に注目したい。この *wld* を動詞 (v) ととることが上の議論より妥当である (21) から、テクスト (24) の *yld* が G. yqtl. passive. 3.m.s. [yûlad-] であると想定すると (i.e. (27)), *wld* の方は、G. qtl. passive. 3.m.s. [wulida] であると考えられよう。そして、*wld* を wulida と発音するために、音韻法則 (35) が有効であることがここでも確認される。*yld* の方は、*yuwlad->yûlad- という音韻変化 (uw→û) の結果、*primae waw* (R_1=w) の第一子音 w は、表記上は表に現われない。結論的に、テクスト (6) の *wld* を G. qtl. passive. 3. m.s. [wulida] と説明することが提案されたわけである。これは Gordon, Gray, Aistleitner, Sauren-Kestemont によって支持されている (5)ⓑ の立場を音韻論的に支持するものである。

しかしながら、Gordon は最近の翻訳の中で、従来の (5)ⓑ "be born" (*UL*; *UMC*) (5)ⓐ *wld* "child" (*UT*) という自説をひるがえして、もう一つの可能性 (5)ⓒ *wld*="to bear" (不定詞) を提案している (*PLMU*, 42)。この解釈は文脈から十分可能なものである。ただ、問題は、*wld* を G. 不定詞と考えて、[walādu][40] と発音するのには、音韻論的根拠が必ずしもない点である。*primae waw* 動詞 *wld は、通常、ウガリト語では *yld* として現われてい

るのであるから、本来の w (=R_1) が *wld* の中に保持されていると考えるためには、wulida の場合のように、積極的な理由 (e.g. 音韻法則 (35)) がなければならない。ここでは、詳論をひかえて、後述する理由から *wld* を D. 不定詞ととる可能性があるというだけにとどめておく。その場合、Gordon による新しい提案は、強く支持されることになろう。

*　　*　　*

次に、52:64 に注目したいと思う。

(37)　*wl* [*d*] *šb'ny. att. itrḫ*[40a]

このテクストは、Virolleaud による初版にもとづくもので、通常うけいれられている Albright による修正本文[41)]

(38)　*wlt* (!) *šb'n* [.] *y. att. itrḫ*

ではない。残念なことに、この Albright の提案は、そのまま、または少し変更して、代表的な校訂本に採用されてしまった。たとえば、CTA[42)]は、Albright に従ったと注釈して、

(39)　*wl* [.(?)] *tšb'n·y·att. itrḫ*

と読み、*KTU*[43)]は、

(40)　*wl** [.] *tšb'n·y*·att. itrḫ*

と読んでいる。しかしながら、1977 年 8 月 17 日に筆者自らがルーヴル博物館所蔵の粘土板テクストを観察した結果、第三文字は "t" 記号▷── であるには、余りにも位置が下にずれているし、▷── 記号の頭の所に短い垂直の楔 ▽ がかすかに認められた。このことは、第三の記号が▽▽▽/▷▷▷(d) か▽▽▽/▷──(u) である可能性を示している。初期の学者が、*wl* [*d*] (Virolleaud) か *wlu*! (Gaster)[44)] かに読んだことには、それなりの根拠があったと思われる。また、Albright によって初めて想定された、"n" と "y" の間の語分割記号 (·) は、筆者には確認できなかった。にもかかわらず、初めの推定上の記号 (Albright は注意深く、[·] と表記している) が、*CTA* と *KTU* 等では、当然そこにもともと存在していたかのように断定されてしまっている。Albright の提案が彼による本文の内容理解 (Ginsberg に従って、語根 *$šb^c$ に、「7」の代りに「満ちる。満腹させる」という意味を想定する) にもとづいてのもので、主感的な判断が入ったことを認めざるを得ない状況にあって、もう一度、初版の本文に従ってその文法構造を明確にしていく必要があるだろう。

Virolleaud は、1933 年に、このテクストの *wl*[*d*] を (4)ⓒ のように接続詞 *w*+命令形 *ld* と分析し、"Et enfante Šaba'ni, (ô) Femme d'Etraḫ" と訳出

した[45]。その2年後、Ginsberg は、*wld* を、ヘブル語の wālād「子供」にならって、名詞 "offsprings"（構成形複数）と考えた（→(5)ⓐ）[46]。しかし、これらの説は、文脈上から受けいれ難い。他方、Dussaud と Gordon は、*wld* を変則的な (i.e. *primae waw*) G.（カル）能動態 qtl ととり、Šb'ny を動詞の目的語、*aṯt. itrḫ* をその主語とした[47]。

(41) wld+N(o)+N(s)

そして Gordon は

(42) "The wives I have wed[48] have borne the Heptad[49]." (*UMC*)

と訳出した。しかしながら、(41) のような語順は、通常のウガリト語文法からは不適切であることが、Ginsberg 等によって指摘されてきた。しかも、通常の音韻法則 (2) がこの *wld* に限って働かない理由も明らかにされていない。ここで、ケレト・テクスト（上述の(6)）の場合と同様に、*wld* を (5)ⓑ のように *primae waw* 動詞 (R_1=w) G. qtl., passive [wulida] と考え *aṯt. itrḫ* を呼格[50]ととるならば、

(43) wld（受身）+N(s)+N(voc.)

という構文になり、統語論的にも、音韻論的にも困難が解消されることになろう。従って改正訳として、

(44) "The sevenfold has been born, O wives I have wed."[51]

を提案したい。

* * *

次のテクストは、128:III:20（および 5, 21）

(45) *wtqrb. wld bn lh*

であるが、Ginsberg はここでも *wld* を (4)ⓐ のように、wa+yalādu と分析し、"she conceives and bears...." と訳出する[52]。これは、Dahood や Caquot-Sznycer-Herdner 等によって受けいれられているが[53]、音韻論的に難点があることは上述したとうりである。一方、Aistleitner は、(4)ⓑ のように、*wld* を *w+ld*（不定詞）と分析し、"sie wurde begattet und gebar ihm e. Sohn" と訳出する[54]。しかし、この場合も、すでに見たように、*wld* を (4)ⓑ のように説明する形態論的根拠は余り強くはない。これらの説明は、*qrb* を「(子を) はらむ」とか「性交する」と解することによって、接続詞 *w* によって結ばれた **yld* または *ld* を次の段階の出来事、i.e.「(子を) 生む」ことと理解したために生起したのである。しかしながら、*qrb* にそのような意味をもたせる必要はない。ウガリト語の *qrb* は、アッカド語の *qerēbu* のように、「～に近づ

く」、「～に着手する」という意味で[55]、当該テクストは、Gordon のように、"And she comes to term to bear him a son"[56]と訳出する方がより適切である。

さらに、このテクスト (45) の *wld* を *primae waw* ととる者たちも少なからず存在する。たとえば、

(5) ⓐ *wld* (名詞) "birth/Geburt" (Gray, Driver, Gibson, Aartun)[57]

(5) ⓑ *wld* (動詞、R_1=w, G. 受身) : Sauren-Kestemont[58]

(5) ⓒ *wld* (動詞、R_1=w, G. 不定詞) : Godon[59]

これらの学者はすべて、動詞 *qrb* が、アッカド語 *qerēbu* のように、その目的語として「目的の対格」(Akkusativ des Ziels) か不定詞をとると主張している。Gordon は、G. 不定詞 walâd- の *w* (R_1) が保持されている参考例としてヘブル語の wālād「子供」を挙げているだけで、音韻論的な理由づけは与えてはいない。*w* の保持という観点からみれば、wulida と発音される受身形 ((5) ⓑ) が、音韻法則 (35) をみたしており、いちばん有力である。しかしながら、文脈上からは、*wld* は能動態であることがむしろ望ましい。

ここで、我々は全く新しい提案をしたいと思う。*wld* は、アッカド語の場合のように、D. 不定詞 [wullud-] "to give birth (to many)" であると考えることが出来るであろう。この場合、音韻論的にも、上述の音韻法則

(35) $*w \rightarrow w / \#___u$

をみたしているし、形態論的にも、*primae waw* 動詞 *wld の D 語幹は、アッカド語の法的文書や叙事詩のうちによく認められている。たとえば、

(46) ① *šumma awīlum mārī wulludma aššassu īzimma* "if a man, having begotten children, divorces his wife" (*Law of Eshnunna* § 59, A iv 29)

② [*Igi*]*gimi kullassunu uwallid* "I have given birth to all the Igigi" (RA 46, 90 : 47)[60]

③ *mārī* PN *liwallid* (APR 96B, 18)[61]
「PN が子供 (pl.) を生むように !」

当該ウガリト語テクスト (45) の *wld* も、これらのアッカド語テクストと類似した文脈に表われているということも重要である。すなわち、ケレトの妻フライ (Hurray) は、ついには「7 人の息子[62]と 1 人の娘」を生むようになること (128 : II : 23-24, III : 23-24) を意味しているのである。このように、本テクストの *wld* を D. 不定詞 [wullud-] と考えることが文脈的にも、音韻論的にも最

も適切であると思われる。

* * *

最後に、75:I:26-27 の *wld* について論じたいと思う。

(47) *aklm. tbrkk*
wld 'qqm

Gordon は、*UMC* (1965) では *wld* を G. 受動態 ((5)ⓑ) ととり、"The eaters will bless thee! Born are the devourers!" と訳していたが、最近の *PLMU* では、テクストを従来とは異なって区分し、次のように訳出している。

(48) *ḫl. ld*.·[26] *aklm*
tbrkk.·[27] *wld 'qqm*

(49) "Go into labor!.·Bear the Eaters
They will make thee bend the knees.·And bear the Devourers!"[63]

Gordon は、ここでは *wld* を、Aistleitner, Caquot-Sznycer-Herdner, Driver, Kapelrud[64]等と同じく、(4)ⓒ、すなわち *wld*=*w*+*ld* (命令形) と分析しているように見える。この解釈は、一行目の *ld* (命令形) との対応関係から判断して、いちおう可能性があると思われる。

筆者は、*UF* 11 (1979) で、*wld* を D. 不定詞 [wullud-] ととる可能性を示し、(47) の本文にもとづいて、"The eaters will bless thee, giving birth to the devourers" と訳す試みをした[65]。しかしながら、*aklm* "eaters" と *'qqm* "devourers" とが同一の存在を意図している対語であると考えられるから、この試訳は不適切である。いまここに、テクストの新しい分析 (48) にもとづいて再考を試みることにしたい。

テクスト (48) において、*aklm*//*'qqm* であると想定すると、動詞句 *ḫl. ld* "Go into labor! Bear!" と *tbrkk. wld* ". . . ." は並行的に対応していると考えることが適切である。Gordon は、*tbrkk* を、*UMC* では *brk (D) "to bless" ととっていたが、*PLMU* では *brk "to make～bend the knees" (D) と変更している。後者は、(48) のように並行法をとらえる時、**ḫyl* "to go into labor" との対応関係から支持されよう。問題はむしろ *wld* の理解である。もし、一行目の *ld* (命令形) との関係で、二行目の *wld* を w+*ld* (命令形) と分析すると、二行目の動詞句が yqtl+impv. という連続になって、いささか不自然である[66]。ここでは、むしろテクスト (45) の場合と同じく、*wld* に D. 不定詞 [wullud-] を想定して、*tbrkk* の結果として「～を生む」(*wld*) と考え

ることができるのではないだろうか。このことは、一行目の *ḫl* と *ld*. すなわち "to go into labor" の結果として "to bear" するという関係に非常によく対応している。この難解なテクストの試訳として現時点で次のように提案しておくことにしたい。

"Go into labor! Bear the Eaters!

They[67] will make thee bend the knees to bear the Devourers."

* * *

以上の議論をまとめると、ウガリト語 *wld* の解釈には、従来次のようなものがあった。

I ① *w*+*yld* (不定詞)
② *w*+*ld* (不定詞)
③ *w*+*ld* (命令形)

II ① *wld* (名詞)
② *wld* (動詞 *primae waw*. G. passive)
③ *wld* (動詞 *primae waw*, G. infinitive)

しかし、*wld* が出てくる個々のテクストを詳しく検討した結果、現時点において次の様な結論を下すことにしたいと思う。

(A) G. qtl. passive [wulida] と解釈できる場合
....Krt:152, 298; 52:64

(B) D. infinitive [wullud-] と解釈できる場合
....128:III:5, 20, 21; 76:I:27; (Krt:152, 298)

(1981. 9. 4)

Abbreviation List (略号表) —補—

AHw W. von Soden, *Akkadisches Handwörterbuch*

*CML*² J.C.L. Gibson, *Canaanite Myths and Legends*,² 1978.

GAL W. Wright, *A Grammar of the Arabic Language*. Third edition, 1896, 1898

GBH J. Blau, *A Grammar of Biblical Hebrew*, 1976

GVG C. Brockelmann, *Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen*, 1908, 1913

HGHS H. Bauer-P. Leander, *Historische Grammatik der hebräischen Sprache*, 1922.

ICE T.O. Lambdin, *Introduction to Classical Ethiopic*, 1978.

ICGSL S. Moscati *et al*, *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages*, 1969.

KTL J. Gray, *The KRT Text in the Literature of Ras Shamra*, Second edition,

1964.

KTU M. Dietrich-O. Loretz- J. Sanmartin, *Die keilalphabetischen Texte aus Ugarit*, 1976.

LKK H.L. Ginsberg, *The Legend of King Keret*, 1946.

PLMU C.H. Gordon, "Poetic Legends and Myths from Ugarit", *Berytus* XXV (1977), 5–133.

SPUMB J.C. de Moor, *The Seasonal Pattern in the Ugaritic Myth of Ba'lu*, 1971

Thespis[2] T.H. Gaster, *Thespis: Ritual, Myth and Drama in the Ancient Near East*, Second edition. 1961.

Ug *Ugaritica*

(その他の略号は、本誌第1号 (1976), 105f を参照のこと)

* 本論文は、*C.F.A. Schaeffer Festschrift* (= *Ugarit Forschungen* 11) の拙論 "The *VERBA PRIMAE WAW*, WLD, in Ugaritic", pp. 779–82 にもとづいて、具体例を補足しつつ. 同じ主題について詳論したものである。

1) S. Moscati *et al*, *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages: Phonology and Morphology*, Wiesbaden, 1969, p. 46 (§ 8.64); Carl Brockelmann, *Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen*, I: Laut- und Formenlehre, Berlin, 1908, p. 139 (§ 49. f.α.); Joshua Blau, *A Grammar of Biblical Hebrew*, Wiesbaden, 1976, p. 26 (§ 7.3.1); Cyrus H. Gordon, *UT*, p. 32 (§ 5. 21) 等を参照。

2) Wolfram von Soden, *AHw*, 16 (1981), p. 1459 を参照。

3) Blau, *GBH*, § 7.3.1.

4) Gordon, *UT*, § 5.21 & note 3.

5) Gordon, *UT*, § 5.21.

6) 祖形として想定しうる形態に * を付けている。

7) Moscati, *ICGSL*, § 12.5; Blau, *GBH*, § 9.1.5.

8) アクセント移動、語末母音脱落、母音の長音化、Segolization 等の相対的順序付けについての詳しい説明は、Blau, *GBH*, § 9.1.2.～9.1.5. を参照せよ。

9) *primae waw* とは、三子音語根 ($R_1R_2R_3$) に還元した時の R_1 が *waw* であるということ。

10) M. Dietrich-O. Loretz-J. Sanmartin, "Zu *WLD* 'Gebären' und 'Knabe' in Keret-Epos," *UF* 8 (1976), 435–6.

11) H.L. Ginsberg, *LKK*, 17, 40; *ANET*, 144.

12) M. Dahood, *UHP*, 25; A. Caquot, M. Sznycer & A. Herdner, *TO*, 526, note 1; また W.F. Albright, *JBL* 69 (1950), 387 を参照せよ。

12a) もちろんヘブル語では次のような例が認められる。*gâlaya>galâya>galây>gālā́y⇨gālā̆(h): גָּלָה. ウガリト語では、*y* は R_3 の場合でも保持されることがあるし、約音する場合は、ay>ê となる。cf. Gordon, *UT*, § 5.18.

13) *wytn* は、J.C. de Moor, *SPUMB*, 150 も、Ginsberg-Dahood の説に対抗する例として挙げている。

14) Dahood, *UHP*, § 7.68.

15) Sandhi 現象については、P.H. Matthews, *Morphology: An Introduction to the theory of word-structure*, Cambridge, 1974 の第 VI 章 'Sandhi' (特に 112 頁以下) を参照。なお、ウガリト語における Sandhi 現象については、「日本オリエン

ト学会、第22回大会，研究発表要旨（1980年11月23日）於広島大学」を見よ。

16) Gordon, *UT*, § 7.68.

17) Aistleitner, *WUS*, #1166, 2*a

18) Aistleitner, *WUS*, #1255, 13*d

19) de Moor, *SPUMB*, p.150.

20) Moscati, *ICGSL*, § 16.119

21) Gesenius, *GK*, § 69; Bauer-Leander, *HGHS*, § 55 c′.

22) Wright, *GAL*, § 206. 彼によれば、-at 語尾は失われた子音 (R_1) の代償として付けられている。

23) Lambdin, *ICE*, 191–192.

24) Bauer-Leander, *HGHS* § 43b～g. を参照せよ。R_2 の次に元来母音があったであろうことは、kot̲b̲ā(h)[inf. cstr. f. sg] の b̲ が摩擦音化している (dageš lene が脱落している) ことから推論できる。

25) セム語全体を通じて、*primae waw* (R_1=W) 動詞の R_1(W) は、命令形では脱落する。Moscati, *ICGSL*, § 16.119 を参照せよ。

26) Gordon, *UT*, § 19.803; Driver, *CML*, 33, 165; Gibson, *CML*,[2] 86; K. Aartun, *Die Partikeln des Ugaritischen II*, (*AOAT* 21/2), 1978, 44; Dietrich-Loretz-Sanmartín, *UF* 8 (1976), 436.

27) Gordon, *UMC*, 106; Gray, *KTL*, 14; Aistleitner, *MKT*, 92; H. Sauren-G. Kestemont, "Keret, Roi de Ḫubur," *UF* 3 (1971), 200; Jirku および Pedersen (*TO*, 526, no. 1 を参照)。

28) Gordon, *PLMU*, 42.

29) 二行目で a に対応する項目 (a′) が省略されているので、その代りに c に対応する部分 (c′) が拡大されて C′ となっているわけである。このような C′ を Gordon は Ballast Variant と呼ぶ。*UT*, § 13. 116 を見よ。

30) Gordon, *UT*, § 19. 1969

31) Dietrich-Loretz-Sanmartín, *UF* 8 (1976), 436.

32) *UT*, § 13. 120 以下。

32*a*) D. Pardee, "The Preposition in Ugaritic", *UF* 7 (1975), 348 を参照。

33) Gordon, *PLMU*, 12

34) Aistleitner, Andersen, Caquot-Sznycer-Herdner, Driver, Gaster, Gibson, Ginsberg, Gordon 等。なお、G (qal). passive については、Gordon, *UT*, § 9.31 および David Marcus, "The *qal* passive in Ugaritic", *JANES* 3–4 (1970–72), 103–111 を参照せよ。

34*a*) 創世記 41 : 50 (וליוסף יֻלַּד שני בנים)

「ヨセフには、2人の子供が生れた」における yulad (プアル yullad ではない。ל のところの dageš は、子音の重複を示すもの (forte) ではなく、直前の母音を短く保つために機能している) は、*qal* passive で、当該テクスト (24) と類似構造(23) ⓑ をもっている点に注目せよ。

35) *Primae waw* 動詞では、imperfect 形に w(R_1) は現われない。Moscati, *ICGSL*, § 16. 119.

36) Aistleitner, Caquot-Sznycer-Herdner, Driver, Gibson, Ginsberg, de Moor (*SPUMB*, 110) 等。

37) Gordon, *UL*, 22; *UMC*, 56; *UT*, 80; *PLMU*, 82

37*a*) アマルナ文書にみられる yūdanu "given" (EA 126 : 28 *et al*) を参照。cf. J.

A. Knudtzon, *Die El-Amarna-Tafeln*, AAlen, 1964, 1915, p. 1478; M. Th. Böhl, *Die Sprache der Amarnabriefe*, Leipzig, 1909, § 30d (p. 61); Marcus, *JANES* 3–4, 111, no. 25.

38) Gordon, *UL*, 38; *PLMU*, 102

39) ここで、もう一つの *wtn* (51: V: 70) も同様に、[wutina] と説明することができることに注目しておきたい。本文 (70-71) は次のとうり。

wtn. qlh. b'rpt
šrh. larṣ. brqm

この *wtn* は、de Moor, *SPUMB*, 150; Aistleitner, *WUS*, #1255 によって、wtn=wa+tin (不定詞) と説明されているが、(16)～(19) で見たように、形態論的に必ずしも強い理由があるとは言えない。また、Ginsberg, Herdner, Segert (cf. *WUS*, p. 139) 等は、本文を *w⟨y⟩tn* と修正する。しかし、*wtn* を G. qtl. passive. 3. m.s. [wutina] と理解することは、文脈的にも詩の構造解釈の面からも、最も適切であると思われる。私訳として、

"His voice is given in the clouds,
His flash to the land of lightning".

並行法の構造は、a-b-c//b′-C′ という一般的なパターンをとり、v-s-adv. ph.//s′-Adv. Ph. と分析される。

40) Gorcon は *UT*, § 9.48 で *wld* (128: III: 20) が、"inf. abs. walâd-" であるかもしれないと言っている。ただし、Krt テクストの *wld* の方は、この時点では不定詞ととっていない。

40*a*) この箇所についての詳論は、拙著、*The Ugaritic Drama of the Good Gods*, Ann Arbor, 1973, 85–90 を参照せよ。

41) W. F. Albright, "Was the Patriarch Terah a Canaanite Moon-God?" *BASOR* 71 (1938), 37 および note 20.

42) Herdner, *CTA*, 100, note 17 は Albright の提案を受けいれたことを説明している。

43) *KTU*, 68.

44) Charles Virolleaud, "La naissance des dieux gracieux et beaux," *Syria* 14 (1933), 132 ;Theodor H. Gaster," A Canaanite Ritual Drama: the Spring Festival at Ugarit", *JAOS* 66 (1946), 55, 57.

45) Virolleaud, *Syria* 14, 150, 136.

46) H.L. Ginsberg, "Notes on 'the Brith of the Gracious and Beautiful Gods'," *JRAS* (1935), 60.

47) R. Dussaud, "Les Phéniciens au Negeb et en Arabie d'après un texte de Ras Shamra," *RHR* 108 (1933), 14; Gordon, *UL*, 61; *UMC*, 97.

48) これは *awat iqbû* タイプの統語構造のものである。*UT*, § 8.16, (特に no. 1) を参照せよ。

49) この šb'ny とヨブ記 42:13 の שבעה を比べよ。詳しくは、拙著、*The Ugaritic Drama of the Good Gods*, 1973, 87–88 を見よ。

50) 呼格助辞 y がなくても名詞が呼格として機能する場合として、同じテクスト (UT 52) の 60 行目の *il* 他がある。従って、*aṯt. itrḫ* を呼格に扱うために、直前の *šb'ny* の *y* を *šb'n* から切り離すべく工作する (i.e. [·] を推定する) 必要はないのである。

51) 拙著 *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, 1973, 16, 89 を参照。

ところで、Gordon は彼の最新の訳において、従来とは全く異って、"But they

are not satisfied". (*PLMU*, 63) と訳出している。そのため、「良き神々」が7人であるというテクストからの情報が抹殺されてしまったのに、Gordon はなおも、UT 52 を "Seven Good Gods" に関わるテクストと説明している。筆者が個人的に Gordon 博士にたずねた所、*KTU* の本文をそのまゝ受けいれたためと釈明しておられた。しかし、*KTU* 自体、本文校訂において難点があることは、すでに見た 52: 64 だけでなく、多くの所で認められつつある。

52) Ginsberg, *LKK*, 23.

53) Dahood, *UHP* 25; Caquot *et al*, *TO*, 540, no. m.

54) Aistleitner, *WUS*, #1166; *MKT*, 97.

55) Dietrich-Loretz-Sanmartin, *UF* 8, 435f を参照。

56) Gordon, *PLMU*, 48.

57) Gray, *KTL*, 19, 60; Driver, *CML*, 37, 165; Gibson, *CML*², 92, 146; Aartun, *Die Partikeln des Ugaritischen II*, 44.

58) Sauren-Kestemont, *UF* 3, 206

59) Gordon, *UT*, 85: "inf. abs. *walâd-*"

60) *CAD* A-I, 292f.

61) *AHw*, 1457.

62) 「7人の息子」を生むという理想的なテーマについては、拙著 *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, 192–194 を参照せよ。

63) Gordon, *PLUM*, 123.

64) Aistleitner, *WUS*, #1166; Caquot *et al*, *TO*, 341; Driver, *CML*, 71; A.S. Kapelrud, "Baal and the Devourers", *Ug. VI* (1969), 320: "The Devourers will make you kneel, so bear the Voracious Ones !"

65) D.T. Tsumura, *UF* 11, 782.

66) ヘブル語散文で通常よくある順序は、impv. + impv.; impv. + qtl; impv + yqtl であって、命令形が後者に来ることはまれである。T.O. Lambdin, *Introduction to Biblical Hebrew*, London, 1971, § 107 を見よ。

67) 非人称の3人称・複数形と考える。